



初めてゲラを手にした時

平野啓一郎

「ゲラ」というのは、「ゲラ刷り」の省略で、原稿を印刷所に入稿した後に出てくる、試し刷りのことである。英語の galley proof が語源で、活版印刷の活字を並べる枠箱を、ギャリー船に喩えたのが由来だそうだが、「ギャリー」がどうして「ゲラ」になったのかは詳らかにしない。

今日では、原稿もパソコンで書いてメールで送信し、デジタル・データが印刷所に入稿される DTP が一般的なもので、ギャリー船とも無関係だが、習慣的に、レイアウトがなされたデータは、PDF であってもゲラと呼ばれている。

このゲラに、編集者や校閲者が赤でチェックを入れ、作者はそれを一つ一つ確認しながら、推敲作業を進めるのである。

ところで、この「ゲラ」という業界用語は、一般に、どの程度、知られているだろうか？

私は実は、小説家としてデビューするまで、この言葉を知らなかった。『新潮』に、第一作目の『日蝕』の原稿の掲載が決まった時、話の中で当然に、「このあと、ゲラが出ますので、……」といったやりとりがあったが、私はそれがよくわからなかった。ただ、「何ですか、それ？」と尋ね返す勇氣もなく、話の流れから、恐らく試し刷りのことだろうと見当をつけたのだ。

結局、それで正しかったわけだが、それにしても、そもそも「ゲラ」を知らなかったクセに、実際に紙のゲラを手にした時の感動は、筆舌に尽くし難いものだった。

私は、当時は小説をワープロで書いていたが、その画面は小さく、原稿を推敲する時には、やはり一度、紙でプリントアウトしていた。しかし、A4の感熱紙の安っぽい印刷とは違い、ゲラはフォントからレイアウトから、何から何までが本物の本らしく、私は、自分が人知れず続けていた執筆という行為が、職業的な創作活動へと転じたのを、その重みと手触りと共に、初めて実感したのだ。

『日蝕』のゲラは、雑誌掲載を経て単行本になるまでに、何校くらいまで出ただろうか？

古典的な文体であり、また中世ヨ



ひらの・けいいちろう●小説家。愛知県生まれ。北九州市出身。京都大学法学部卒業。1999年在学中に『日蝕』で芥川賞受賞。2014年フランス芸術文化勲章シュヴァリエを受章。『マチネの終わりに』は映画化され、58万部のベストセラーとなった。19年『ある男』で読売文学賞を受賞。他著書に『葬送』『空白を満たしなさい』『透明な迷宮』『私とは何か〜「個人」から「分人」へ』『カッコいい』とは何か』等。

ロッパを舞台としていたために、校閲からも編集部からも、細かな疑問や指摘があったが、全体の構成や内容に関しては、ほとんどそのまま受け容れられた。

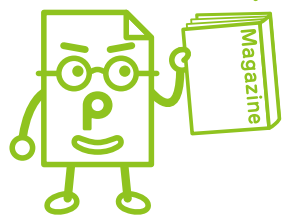
ゲラは、初校から再校、念校と、回を重ねる毎に赤字が減ってゆき、完成が近づいてくるところに喜びがある。今日では、多くの作家がパソコンで執筆をしているので、文学記念館に陳列するような自筆原稿は少なくなっている。ゲラは、その意味では、紙の上に作者の痕跡が留められる、数少ない創作の物証で、実際の私の単行本化に際しての『日蝕』のゲラは、芥川賞受賞作の通例に倣って、日本近代文学館に収蔵されている。

では、そのほかのゲラはどうなっているのか？——一般的には、編集部の方で廃棄処分されているはずである。私の手許に残っているものはなく、それが惜しいかというところ、そうでもない。大体、初校は、恥ずかしい間違いも含まれており、それを訂正する私の筆跡もお粗末で、無教養と悪筆の証拠は、隠滅してもらった方が、ありがたいのである。

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

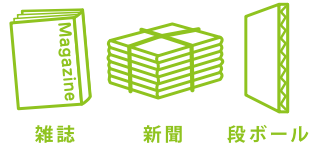
雑誌なら、雑誌だけひとまとめ。

雑誌・新聞・段ボールなど、回収された古紙は、それぞれ違う紙へとリサイクルされます。だから同じ種類の古紙でまとめた方がリサイクルしやすいし、古紙の品質だって良くなるんです。それにその方が持ち運びだってラク。まとめるだけで、いろんなメリットが生まれるんです。



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。

主な古紙の一例



雑誌 新聞 段ボール

その他にも

家庭から出る左記以外の紙(雑がみ)、オフィスペーパー、紙パックなどがあります。
※分別方法は、地域によって異なります。詳しくは自治体または回収者にご確認ください。

<http://kamitsubu.com/>